

郷土の企画展

白鳥館の植物 人里の草花



ウラシマソウ



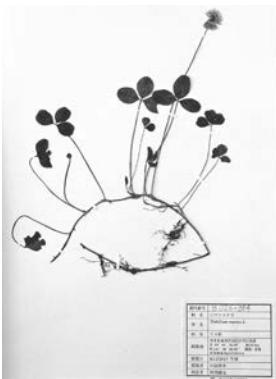
キバナノアマナ



コニシキソウ



メタカラコウ



シロツメクサ



クルマバソウ



クサソテツ



ウマノスズクサ



ゲンノショウコ



キツネノボタン

目次

ごあいさつ	1
奥州市周辺の自然	2
白鳥館のおいたち	3
白鳥館の草花	4
春	5
夏	7
秋	9
暮らして役立つ植物	11
外来植物	13
希少植物	15
植物相の特徴	17
標本はタイムマシン	19
白鳥館遺跡の植物全種リスト	21



フキ

岩手県奥州市前沢区 白鳥館遺跡

雪の下からのぞくフキノトウは、里に春の訪れを告げる野草です。地下茎を伸ばして増えるので、地面のあちこちから顔を出します。フキノトウは花茎というフキの花にあたる部分で、食べると独特のほろ苦さがあります。後からのびる葉柄は煮物などで楽しまれる故郷の味です。

ごあいさつ

牛の博物館がある奥州市は、ブナの原生林が残る奥羽山脈と、人の手が入ったコナラ・アカマツ林が多く分布する北上山地を擁し、北上川に沿って広大な北上盆地を形成しています。気候と地形が独自の植生を育み、独自の自然環境と文化を生み出してきました。

本企画展では、国指定史跡白鳥館遺跡において採集された草花を展示し、植物相の特徴や人里で営まれてきた自然と人の関係を紹介します。乾燥したさく葉標本は一見すると地味ですが、植物が生きていた時の形を保ち、中には花の色を残しているものもあります。特徴をよく観察し、植物の分布や生活史を合わせて知れば、それぞれの植物が周囲の環境に適応しているようすを理解することができます。ここで紹介する植物は、ごくありふれた人里の植物ですが、この植物相は地域の地史や歴史の上に成り立ったものです。身近な草花が、昆虫や鳥類など自然に目を向けるきっかけとなれば幸いです。

最後に、本企画展の開催にあたり、たくさんの方々にご協力を賜りました。皆様に心より感謝申し上げます。

平成30年2月

奥州市牛の博物館
館長 鈴木 啓一

奥州市周辺の自然

奥州市は冷温帯落葉広葉樹林帯（ブナ帯）の下部に位置しています。西側には雪が多く原生林が残る奥羽山系が、東側には人の手が入り管理されてきた北上山系が位置し、中央には北上盆地が広がり、多様な環境を育んでいます。白鳥館は奥州市の南端、北上川の西側に位置し、積雪量の少ない比較的穏やかな内陸型の気候です。

■奥羽山脈

奥羽山脈は東北地方の中央部を南北に走っています。岩手山や栗駒山などの火山が連なり、新第三紀の堆積物と火山岩類から成る比較的新しい地質構造を示し、急峻な地形を形作っています。奥州市から望むことができる焼石連峰には渓谷や湿原があり、高山植物が自生します。気候は日本海側から偏西風がもたらす寒冷多雪な気候です。標高400～500m以上の地域にブナが自生し、2mを超える積雪に適応したチシマザサなどが林床に生育し、山間部には原生林が残っています。



焼石連峰と胆沢扇状地

■北上山地

北上山地は岩手県の約3分の2を占める山地です。古生代の堆積層と花崗岩や蛇紋岩などの火成岩から成る固い岩盤で、数億年をかけて浸食されて現在のような、なだらかな地形になりました。北上山地の東側から太平洋沿岸にかけては、低温ながらも積雪は少ない気候です。標高が600～700m以上の地域でブナ林が見られ、原生林を伐った後にはミズナラ、コナラ林などが、乾燥地にはアカマツの植林などの二次林が広く分布します。北上山地では牛や馬を飼うための放牧地として草地が維持され、炭の生産のために定期的に木を伐採するなど、人の手が加えられてきました。



北上川

■北上盆地

北上川は岩手県岩手町の弓弭の泉に始まり、県中央部を南北に縦断し、宮城県石巻市で、石巻湾・追波湾に注ぎます。北上川流域には奥羽山脈から

の火山性碎屑物^{まいせつぶつ}が広く堆積したため、川は堆積物に押しやられて低地の東側を流れています。奥州市周辺は胆沢川が奥羽山脈から堆積物を運んで形成した胆沢扇状地が広がっており、堰^{せき}の開削など近世の水田開発により東北有数の穀倉地帯となっています。東西を山に挟まれた地形であるため、冬が寒く夏が暑い内陸型、盆地型の気候を示します。



牛の博物館から望む北上山地

白鳥館のおいたち

国指定史跡白鳥館遺跡は北上川の蛇行部に半島状に突き出した丘に位置します。ここは、安倍貞任の弟、白鳥八郎則任（行任）の居所と伝えられてきました。平泉の中心部から北東に約5kmの距離にあり、都市平泉の舟運を担う『川湊』であった可能性が指摘されています。白鳥館は、集落、工房群、城館など役割を変えて利用され、人が生活する里の環境が古くから維持されてきました。

■工房群から城館へ

発掘調査から、白鳥館遺跡には弥生時代から人が住み始めたことが分かっています。10世紀頃から集落として利用され、平泉文化が花開いた12世紀の遺構からは最も多く遺物が出土しています。特に、かわらけ、国産の陶器、外国産の陶磁器などが平泉中心部に次ぐ密度で出土していることから、ここが都市平泉にとって重要な場所であったことがわかります。12～15世紀前半にかけては、鍛冶炉跡、かわらけ窯跡などの遺構や、鉄滓、砥石、ふいごの羽口などの遺物が発見されており、鉄や銅、かわらけ、石製品などの製作や加工といった手工業生産が行われていたと考えられています。

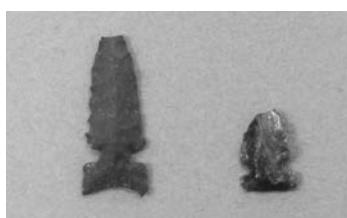
14世紀後半には白鳥館の低地から丘陵部へ拠点を移して城館が築かれますが、15世紀半ばには葛西氏の支配が進む中で城としての機能を失い、一般的な村に変化していきます。



白鳥館遺跡

■流通の拠点

白鳥館が古代から工房や城館として利用され続けたのは、この場所が交通の拠点であったからだと考えられています。北上川を上り下りする水上交通だけでなく、川の渡河点として街道につながる陸上交通でも重要な場所でした。平泉の遺跡からは、常滑窯や渥美窯を中心とした東海地方産の陶磁器が大量に出土することから、北上川の舟運と太平洋の海運を介した交易が、都市平泉を支えていたと見られ、この白鳥館遺跡が『川湊』の機能を持っていたと考えられています。白鳥館では、工房群が発達した12世紀から、平泉の川湊としての利用が始まり、奥州藤原氏の滅亡後も廃絶することなく川湊・工房群としての機能が引き継がれたようです。



アメリカ式石鏃
弥生時代



古瀬戸瓶子 15世紀中葉



信楽壺 15世紀中葉



鍛造剥片 平安時代 10世紀



製鉄炉壁 平安時代 10世紀

白鳥館遺跡出土遺物 奥州市 所蔵

弥生時代以降、各年代の遺物が出土しています。信楽、古瀬戸などの焼き物からは全国的な交易の存在がうかがわれます。鍛造剥片は、鉄を空気中で加熱して叩いた時に飛び散った破片です。金属を加工する鍛冶の工房があったことを示しています。

白鳥館の草花

白鳥館は、現在も民家、水田、林があり、古代から人が暮らし続けてきた里山環境です。この解説書で紹介する植物は、平成29年（2017）に牛の博物館が行った「白鳥館遺跡植物調査」で生育が確認された植物です。白鳥館遺跡では、10年前の平成19年（2007）にも植物相調査が行われており、その間の植物相の変化を知ることができます。

■自然の状態を記録する

自然環境の記録は、将来にわたり地域の環境を維持していく上で非常に重要です。希少種（レッドデータブック記載種）や特定外来生物の存在を把握するために、白鳥館遺跡内で確認される植物種を記録した全種リストを作成しました。長期的に調査を行うことで、過去と現在の植物を比較し、地域の生態系の特徴や人による維持管理、外来種の侵入度合などを把握し、今後の自然環境の維持に役立てることができます。

調査は、平成29年度全国科学博物館活動等助成事業の助成を受けて、平成29年（2017）4月から10月にかけて毎月1回行いました。調査範囲は白鳥館遺跡の史跡指定範囲内で、草地、針広混交林、針葉樹林、河畔林、遊歩道、農地、竹林を含む環境です。フロラ法に基づき、調査地内に調査コースを設定し、時速2km以下で徒歩で移動しながら、コース両側25m以内の範囲に出現する植物種を目視により識別し、生育している植物を記録しました。

調査結果を自然史資料として後世に残すことを目的として、花期や種子が実っている時期など種の特徴を示す個体の写真撮影を行ったほか、植物を採取して、さく葉標本を作製し、牛の博物館に収蔵しました。



白鳥館遺跡周辺の水田と林



白鳥館遺跡の位置

■白鳥館の植物相

平成29年（2017）の調査では、維管束植物（木本、草本）とシダ植物を合わせて339種が確認されました。10年前の平成19年（2007）と2回の調査結果を合わせると、白鳥館で記録された植物は386種となり、巻末の全種リストのような結果になりました。この内、今回の調査で新たに確認された種は138種でしたが、今回確認されなかった植物も46種ありました。増加の要因は、調査回数の増加と新たに整備された低地の散策路を調査コースに加えたことによるものです。一方、確認されなかった種については、人為的な環境の変化による影響が考えられます。

白鳥館で確認された外来植物は51種と、全体の15%に上ります。これは、低地の散策路周辺において、湿地性の外来植物が多く確認されたためです。一方、特定外来生物のアレチウリは、北上川の洪水や草刈りにより、10年前と比べると自生範囲がかなり縮小していました。

また、希少種のオミナエシの生育や、コウモリカズラの開花・結実を今回は確認することができませんでした。

外来種の拡大食い止めや希少種の保存において、除草剤の散布や草刈りの頻度などの管理の方法が、重要な鍵をなぎると言えます。

春

雪が解けると植物が芽吹き始めます。野原や畠などの日当たりのよい場所では、明るい場所を好む植物が競争しながら一斉に葉を広げ、花をつけます。

早春の短い期間だけ葉を伸ばし、花を咲かせるスプリング・エフェメラルと呼ばれる植物もあります。これらは、木々に葉が茂り林床が暗くなる頃には地上部は枯れてしまい、1年の大半を球根や地下茎で過ごします。

フタリシズカ 【二人静】 センリョウ科 花期：4～6月

静御前が登場する能の謡曲「二人静」に名前が由来します。花穂が2本のものが多いですが、1本や3～5本のものもあります。花びらではなく、白く丸いものは雌しべを囲むように並んだ雄しべです。



クサノオウ 【草の黄、瘡の王】 ケシ科 花期：4～7月

茎や葉を切ると黄色の乳液が出ます。この汁は有毒ですが、鎮静、鎮痛作用、胃の痛み止めやカビによる皮膚病の治癒にも用いられました。



ムラサキケマン 【紫華鬘】 ケシ科 花期：4～6月

華鬘とは仏殿の欄間などの装飾具のこと、花鳥や天女などを透かし彫りした金銅具です。花の形が華鬘に似ていることが名前の由来です。有毒植物で、食べると嘔吐、昏睡などの症状を引き起こします。



タネツケバナ 【種漬花】 アブラナ科 花期：3～6月

稻の種まきの前、種粉を水に浸している頃に咲くことから、「種漬花」と呼ばれます。田起こし前の水田などの湿地に群生します。



ヘビイチゴ 【蛇苺】 バラ科 花期：4～6月

やや湿った場所を好み、実に毒はないですが、あまりおいしくないです。茎は地を這い、走出枝という茎を伸ばして株を増やします。



ヤマブキ 【山吹】 バラ科 花期：4～5月

山の湿った斜面や木陰に生え、庭木としても見かけます。橙色と黄色の中間的な「山吹色」の語源にもなっています。



ハハコグサ 【母子草】 キク科 花期：4～6月

枝先に黄色の頭花を複数つけます。頭花の中には、両性花を雌性花が囲むように詰まっています。他のキク科植物のような花びらのように見える舌状花を持ちません。



ビロードスゲ 【天鵝絨苔】 カヤツリグサ科 花期：5～6月

河原や水田などの湿地に生育します。地下匐枝を伸ばして群生します。果胞と呼ばれる穂に灰色の毛が密集してビロードのように見えます。



キュウリグサ 【胡瓜草】 ムラサキ科 花期：3～5月

葉をもむと胡瓜の香りがすることからこの名前がつきました。道端や庭など身近で見られます。小花のつぼみがくるりと巻いた穂につき、下から順にほぐれて咲く「サソリ状花序」と呼ばれる花のつきかたをします。



エンレイソウ 【延齡草】 シュロソウ科 花期：4～5月

山地の林の中で見られます。3枚の葉、3枚のがく片を持ちます。熟した実は食べることができ、根は胃腸薬などの薬とされてきましたが、有毒成分も含んでいます。



サイハイラン 【采配蘭】 ラン科 花期：5～6月

武将が用いた采配に花の形が似ていることが、この名前の由来です。花の最盛期には横向きに咲いていますが、その後だんだん下向きになっていきます。



夏

気温が上がり、日長が長くなると、植物が成長して葉を広げ、太陽の光をめぐる競争が激しくなります。林床では、暗い環境に適応した植物がひっそりと花を咲かせ、野原や林縁では強い光を好む植物が活発に光合成をし、緑が濃くなっていきます。

ヤマキツネノボタン 【山狐の牡丹】 キンポウゲ科 花期：7～9月

山地の湿気のある場所に生えます。花には5枚の花びらがあり、くちばし状に尖った扁平な実が集まり、コンペイトウのような形をしています。



ダイコンソウ 【大根草】 バラ科 花期：6～8月

林道などで見られます。葉がダイコンに似ていることが名前の由来です。1つの花にたくさんの雄しべと雌しべがあり、実が集まって球形になります。カギ付きの実は動物の毛にひっかかるひつつき虫です。



キツリフネ 【黄釣舟】 ツリフネソウ科 花期：6～9月

山地の渓流沿いや湿った場所に生育します。花の袋状の部分はがくにあたる部分で、他のツリフネソウの仲間と違い、先がくるりと巻かず、曲がっているだけです。



ヤブガラシ 【藪枯らし】 ブドウ科 花期：6～8月

ツル性の植物で、巻きひげを出して2～4mに伸びます。地下茎を長く伸ばして、繁茂し、藪を枯らしてしまうほどの繁殖力からこの名前がきています。5mmほどの小さな花は蜜が豊富で昆虫を呼び寄せます。



クルマバソウ 【車葉草】 アカネ科 花期：5～7月

山地の林内に生えます。6～10枚の葉が車輪状に茎を囲むように並びますが、本当の葉は2枚だけで、残りは托葉と呼ばれ、本来葉の基部につく葉が大きく成長したものです。



ヤエムグラ 【八重葎】 アカネ科 花期：4～6月

里の藪や荒地に生育します。茎には4つの稜があり、断面が四角くなっています。葉と茎にトゲがあり、藪で他の植物の上で安定して茎をのばすことができます。



ホタルブクロ 【萤袋】 キキョウ科 花期：6～7月

山野や丘陵に生育します。花が咲く直前に雄しべが成熟し、ハナバチによって花粉が外へ運ばれた後に雌しべが成熟し、同じ花の花粉で受粉しない仕組みになっています。



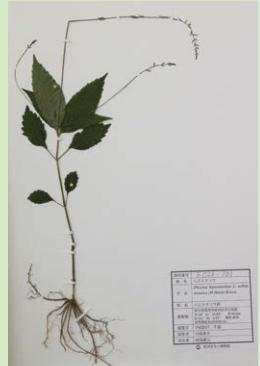
クサヨシ 【草葦】 イネ科 花期：5～6月

湿地や草地に生育します。高さは1.8mにもなり、地下茎を伸ばして群生します。牧草として利用され、牧場や道端でも見られます。アシ（ヨシ）に似ていて、全体に草質です。



ハエドクソウ 【蠅毒草】 ハエドクソウ科 花期：7～8月

林の中などに生えます。穂にまばらに花が咲いていきます。有毒な成分を含み、食べると嘔吐などを引き起こします。根を煮詰めた汁でハエ取紙を作ったことが名前の由来です。



キツネノカミソリ 【狐の剃刀】 ヒガンバナ科 花期：8～9月

細長い葉から剃刀を連想したことが名前の由来です。明るい林床や林縁に生育します。春に伸びた葉が夏に枯れ、その後に花茎をのばします。鱗茎にアルカロイドを含み、食べると、吐気、下痢などを起こします。



マムシグサ 【蝮草】 サトイモ科 花期：4～6月

茎の表面の斑紋がマムシの模様に見えます。花を包む仮炎苞が特徴的です。秋にはトウモロコシ状の赤い実をつけます。全草有毒で、口に入れただけで激痛が走ります。



秋

季節が進むと、植物は蓄えた栄養を実や種にして次の世代を残します。キク科、イネ科などの植物は日長がある一定時間よりも短くなると花芽を発生し、秋の花や実をつけます。ひつつき虫や色とりどりの実は種子を広く散布させる植物たちの戦略です。

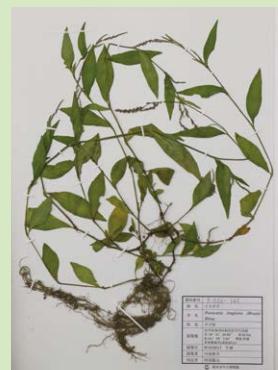
ミズヒキ【水引】 タデ科 花期：8～10月

30cmほどある長い花序に赤い小さな花がついています。花の上半分が赤く、下半分が白いため、上から見ると赤く、下から見ると白いので紅白の水引に例えられました。



イヌタデ【犬蓼】 タデ科 花期：6～10月

料理の薬味のタデと違って、辛みのない本種は役に立たないとの意で「犬蓼」とつけられました。穂の中の花は数個ずつ咲きますが、つぼみも実も紅色で穂全体で花が咲いているように見せて虫をおびき寄せます。



タニソバ【谷蕎麦】 タデ科 花期：8～10月

田の畦や山地の湿ったところに生えます。秋になると茎が赤色を増し、赤色を帯びた小さな花を枝先や葉の脇につけます。ソバと同じタデ科で、葉の形がソバに似ています。



イノコズチ【猪子槌】 ヒュ科 花期：8～10月

茎の節のふくらみが、イノシシの膝のようで、これを槌に見立てたことが名前の由来と言われます。根を「牛膝」と呼び、利尿、精力作用のある漢方薬として使われました。ヘアピン状の針がある種子は、動物などの体について運ばれます。



ツリフネソウ【釣舟草】 ツリフネソウ科 花期：8～10月

帆掛け舟に似ていることからこの名前になりました。手前に突き出た2枚の花びらは、マルハナバチの仲間が蜜を集め際に留まるのにちょうどよい形になっており、花の奥に潜り込んだハチの体には花粉がつき、他の花へ花粉を運びます。



ウマノミツバ 【馬の三葉】 セリ科 花期：7～9月

林の中で目立たない花を咲かせます。葉がミツバに似ており、この名前がついていますが、毒があって食べられません。



ナンブアザミ 【南部薊】 キク科 花期：8～10月

雪の多い地域に生育します。春先にロゼット型に葉を伸ばし、若い葉は山菜として食用になります。他のアザミの仲間と同様、葉に棘があり、両性の筒状花^{とうじょうか}が集まって頭花をつけます。



エノコログサ 【狗尾草】 イネ科 花期：8～9月

日当たりのよい道端や荒れ地で見られます。花序が犬のしっぽに似ていることが由来です。ネコジャラシとしても親しまれています。



キツネノマゴ 【狐の孫】 キツネノマゴ科 花期：8～10月

山野や人里の道端などでよく見られる植物です。穂先に淡紅色の小さな花をつけ、1～2個ずつ開花していきます。



ヌカキビ 【糠黍】 イネ科 花期：7～10月

林のわきや湿地や休耕田でよく見られます。2mmほどの楕円形の小穂がまばらにつくので、これを糠に例えてこの名がつきました。



タマガヤツリ 【玉蚊帳吊】 カヤツリグサ科 花期：8～10月

川岸などの湿地に生育しますが、水田でもよく見られます。穂の先に長い苞葉を2～3枚つけ、その中心部にある丸い小穂が玉のように見えます。



暮らして役立つ植物

ごく身近にみられる野草でも、我々の衣食住に使われてきた植物があります。山菜としておなじみのものから、薬草、繊維の材料など、昔の人は野草を衣食住にうまく利用してきました。

■生活を支える

カラムシ 【茎蒸】 イラクサ科 花期：7～9月

イラクサの仲間は毒のある棘を葉や茎に持っていますが、カラムシは触っても棘が痛くありません。青苧、苧麻など別名も多く、繊維は古くから衣類、紙、漁網の材料に利用されていました。



イ 【蘿】 イグサ科 花期：6～9月

畠表の材料になるイグサです。湿地を好むので、水田で栽培することができます。茎は円柱形で細く、花の下は花茎、花の上も茎のよう見えますが、花から伸びた苞葉です。葉は退化して茎の下部を包む鞘のようになっています。6枚の花びらを持った花が多数つきます。



■薬草

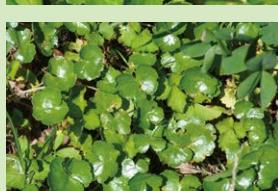
ゲンノショウコ 【現の証拠】 フウロソウ科 花期：7～10月

漢方薬として有名です。飲めばすぐに薬効があらわれることから「現の証拠」という名前がついています。果実はくちばし状で、熟すと下部についた5個の種子がはじけ飛びます。はじけた実の形が神輿の屋根に似ていることから、「ミコシグサ」とも呼ばれます。



オオチドメ 【大止】 セリ科 花期：6～10月

山野で見られます。小さな傷にこの植物の葉をもんだ汁をつけて止血に用いたことからこの名前になりました。茎が地を這って伸び、節から根と葉を出して成長します。小さな花が十数個、球状に集まって咲きます。



■山菜

クサソテツ 【草蘇鉄】 イワデン科

野や山の湿った場所に生育します。「コゴミ」として親しまれ、山菜としては珍しくアツ抜きなしで食べることができます。方言の「コゴミ」とは若芽が人がかがんでいる姿に見えることが由来と言われます。



イタドリ 【虎杖】 タデ科 花期: 7~10月

海岸から高山まで幅広く生育します。雄株と雌株があり、どちらも白い小花を穂状につけます。シユウ酸カルシウムを含むため生では強い酸味がありますが、塩漬けにすると酸味がやわらぎます。乾燥させた根茎は漢方薬になり、イタドリの名は痛み止めの薬として用いたことに由来すると言われます。



セリ 【芹】 セリ科 花期: 7~8月

田の畔や小川、湿地などに生えます。東北地方ではおひたしや鍋料理に欠かせない具材です。散形花序という、小さな花が台状に咲く構造で、昆虫を長く滞在させてより多くの花粉を送り出します。生育地には同じセリ科の有毒植物のドクゼリが混ざっているので注意が必要です。



ウワバミソウ 【蟒蛇草】 イラクサ科 花期: 4~9月

「蟒蛇」^{うわばみ}とはヘビのことで、ヘビの出そうな暗くて湿った場所に生育することから、この名がつきました。雄株と雌株があります。湿地に生えるため、東北地方では「ミズ」という方言で呼ばれ、茎とムカゴは食用になります。



ワサビ 【山葵】 アブラナ科 花期: 3~5月

山地や渓谷の渓流に生育します。野生のものは根茎^{こんけい}が細く、清流の中で生育すると太く育ちます。強い刺激性のある香気を持つため、太く育った根茎が薬味として利用されるほか、茎や葉も食用になります。



ヨモギ 【蓬】 キク科 花期: 9~10月

山野や里の道端などでも見かけます。ヨモギの花に花びらがなく目立たないのは、キク科としては珍しく風で花粉を運ぶ風媒花だからです。ヨモギには葉を守る細かい毛が生えており、草餅に入れると毛が絡み合って餅に粘り気を出すほか、毛を集めてお灸のもぐさにも利用されます。



外来植物

もともとその地域に分布しておらず、人の活動によって他の地域から入ってきた生物種を外来種と呼びます。外来種が入ってくることで、その地域にいた在来種の生育環境が奪われて生態系のバランスを崩してしまったり、在来種と交雑して在来生物が本来持っていた遺伝子が失われるなど、その地域独自の自然環境や生物多様性が脅かされる可能性があります。

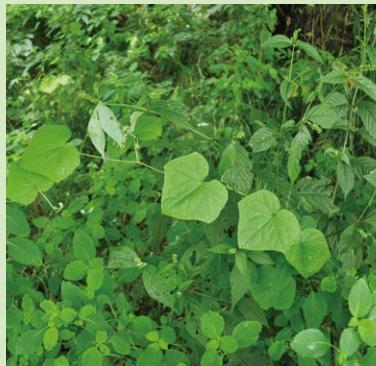
■特定外来生物の植物

特定外来生物被害防止法に基づき、生態系、人の生命・身体、農林水産業に被害を及ぼしたり、及ぼすおそれのある外来生物（侵略的外来種）の中から、規制・防除の対象とするものを「特定外来生物」とし、飼育・栽培、運搬、輸入、野外への放出、譲渡などが規制されています。

アレチウリ 【荒地瓜】

原産地：北アメリカ ウリ科 花期：8～10月

アメリカやカナダからの輸入大豆に種子が混入して広がったと考えられています。成長速度が非常に早く、長さ数～十数mになり、1株あたり400～500個の種子をつけ繁殖します。在来植生を覆って枯死させるなどの影響があります。1952年に静岡県清水港で確認され、現在では青森県以南の日本各地に定着しています。



■生態系被害防止外来生物の植物

特定外来生物以外で、日本国内で生態系や人、農林水産業に悪い影響を及ぼす恐れのある植物です。

ハルジオン 【春紫苑】

原産地：北アメリカ
キク科 花期：5～7月

大正時代に園芸品種として渡来しました。つぼみは下を向き、花が咲くと上向きになります。近縁種のヒメジョオンよりも花が大きく、葉の基部が茎を取り囲むように広がっており、茎が中空なのが特徴です。



ヒメジョオン 【姫女苑】

原産地：北アメリカ
キク科 花期：6～10月

明治の初めごろに観賞用として日本へ渡来しました。日本全土に帰化し、亜高山帯でも見られます。ハルジオンよりも花が小さく、つぼみは下を向かず、茎には白い髄が詰まっています。



アメリカセンダングサ 【亞米利加梅檜草】

原産地：北アメリカ
キク科 花期：9～10月

昭和初期には珍しかったものが、現在では日本全土に帰化しています。代表的な水田雑草のひとつで、河川敷や水辺の在来植物と競合する可能性があります。実には逆さ向きのトゲがついた冠毛が2本突出しており、服などにくっつきます。



力モガヤ 【鴨茅】

原産地：地中海～西アジア
イネ科 花期：5～7月

1860年代に牧草として輸入されました。オーチャードグラスとも呼ばれ、チモシーと並ぶ主要な牧草です。北海道から九州に分布しているほか、世界各地に侵入しています。在来植物との競合のほか、花粉が花粉症の原因となるなどの問題があります。



■その他の外来植物

ヨウシュヤマゴボウ 〔洋酒山牛蒡〕

原産地：北アメリカ
ヤマゴボウ科 花期：6～9月

明治初期に有用植物として日本へ渡来し、現在日本全土に帰化しています。濃い紫色の果汁は染料となり、アメリカではインクベリーと呼ばれています。果実・根・葉すべてに有毒成分を含み、食べると腹痛、嘔吐、下痢を起こします。



セイヨウアブラナ 〔西洋油菜〕

原産地：ヨーラシア
アブラナ科 花期：3～5月

明治初期にヨーロッパから入り、種子から油をとるために栽培されていました。北海道から九州に帰化しています。



シロツメクサ 〔白詰草〕

原産地：ヨーロッパ
マメ科 花期：5～8月

クローバーとして親しまれているこの植物は、江戸時代に持ち込まれた帰化植物です。牧草、蜜源植物として世界中に広まりました。名前の「白詰草」は、欧米から陶器などを輸入する際に、花を梱包材として箱に詰めていたことに由来します。



アメリカフウロ 〔亞米利加風露〕

原産地：北アメリカ
フウロウ科 花期：5～9月

昭和初期に日本へ渡来し、本州～九州に帰化しています。在来種のゲンノショウコに似ていますが、葉に長い柄があり、縁が紫色を帯びます。果実は熟すと、さやが5枚に裂けてバネのように反りあがり、根本についた5個の種子が飛び出します。



コニシキソウ 〔小錦草〕

原産地：北アメリカ
トウダイグサ科 花期：6～11月

1895年に初めて国内で確認され、現在ではほぼ全国に定着しています。近縁種のニシキソウなど在来種と競合します。



ヒメオドリコソウ 〔姫踊子草〕

原産地：ヨーロッパ
シソ科 花期：4～5月

明治時代中期に渡来し、現在では日本全土に帰化しており、北アメリカや東アジアに分布を広げています。道端や休耕地などで見られ、大きな群落をつくることもあります。在来種のオドリコソウより草丈が小さいので、名前に「姫」がついています。



ノボロギク 〔野檻樓菊〕

原産地：ヨーロッパ
キク科 花期：5～8月

1887年に国内で確認され、畑地、道ばたなど人の身辺に定着しています。国内では全国で見られ、世界各地に帰化しています。家畜が食べると有害な成分を含んでいるので、牧草地などでは注意が必要です。



ハルガヤ 〔春茅〕

原産地：ヨーロッパ
イネ科 花期：5～7月

明治時代初期から牧草、芝として北海道に導入され、1890年ごろ東京で生育が確認されています。日本全国に分布しているほか、世界各地に侵入しています。在来植物と競合する以外に、花粉が花粉症の原因となるなどの問題があります。



希少植物

白鳥館で見られる植物は、本来ごく普通の人里で見られる植物です。しかし、一部の種は岩手県周辺では数が少なく、小さな自生地が搅乱されることにより、地域的な絶滅を招く可能性があります。白鳥館に自生している植物の中から、現在県内で数が少なくなっている種を紹介します。

ナラガシワ 【檜柏】

ブナ科 花期：4月
岩手県レッドデータブック Cランク

暖温帯に自生する落葉高木です。長さ30cmにもなる大きな葉と、秋には長さ2cmほどのドングリをつけます。岩手、秋田県以南の本州、四国、九州、台湾やヒマラヤ地方にも分布します。



他地域で撮影

メタカラコウ 【雌宝香】

キク科 花期：7～9月
岩手県レッドデータブック Cランク

高原の湿った草原や谷川沿いなどに生育します。舌状花が1～3個集まつた頭花が花穂にたくさんつきます。名前の「宝香」は芳香を持つ「龍脳香」を指し、メタカラコウや近縁種のオタカラコウの根がその香りを持つからと言われています。本州以南、中国本土、台湾にも生育します。



力ヤ 【榧】

イチイ科 花期：5月
岩手県レッドデータブック Dランク

主に山地で見られる常緑高木です。雄株と雌株があり、里山の農家ではよく雌株が植えられています。2～4cmの楕円形の実が3個並んでつき、種子から油をとって、食用にしたり、灯火用にしました。岩手県以南に分布するとされています。



ウマノスズクサ 【馬の鈴草】

ウマノスズクサ科 花期：6～10月
岩手県レッドデータブック Dランク

里山や河川敷で見られるつる性植物です。関東以南では比較的よく見られますが、東北地方ではまれです。花の球形の部分に昆虫を誘導して閉じ込め、雄しべが成熟するとハエが脱出できるようになります。ジャコウアゲハの食草のひとつで、幼虫は葉に含まれる毒性のあるアリストロキア酸を体内に蓄積し、蝶を食べた捕食者が中毒を起こします。



コウモリカズラ 【蝙蝠蔓】

ツヅラフジ科 花期：5～6月

日当たりのよい草原や森林の縁を好む、つる性木本です。雄株と雌株があります。白鳥館では特定外来生物に指定されているアレチウリとの混生が確認されており、生育地をめぐる競合が心配されます。葉がコウモリの形に似ているのが名前の由来です。北海道から九州、朝鮮半島、中国、シベリア東部に分布します。



イガホオズキ 【毬酸漿】

ナス科 花期：8～10月

山麓の畑地や山地の林縁などの木陰に生育します。ホオズキのようになぐが実を包んでいますが、表面にイガがあるのが特徴です。生育地の環境が維持されるよう、下草刈りなどの管理がされることが望ましいです。北海道から九州、朝鮮半島、中国に分布します。



ヒメニラ 【姫莖】

ユリ科 花期：4～5月

湿り気の多い山野などを好みます。3～4月に葉と花茎を伸ばし、約3週間で地上部が姿を消すスプリング・エフェメラルです。雄株、雌株、両性株があります。北海道、近畿地方以東の本州、四国、朝鮮半島、中国、ウスリー地方などに分布しますが、盗掘による個体数減少が心配されます。



ヒメザゼンソウ 【姫座禅草】

サトイモ科 花期：6～7月

山地の湿った林床や林縁に生育し、群生することもあります。仮炎苞という葉のついた花を地面すれすれに咲かせます。近縁種のザゼンソウよりも全体が小型で葉の枯れる頃に開花する点が異なります。最終氷期の遺存種とされています。北海道から本州、朝鮮半島に分布します。



2007年7月撮影

植物相の特徴

岩手県には多様な気候、土壤環境があり、それにより各地域に特徴的な植物種が分布しています。白鳥館は内陸の北上盆地に位置し、奥羽山脈、北上山地、太平洋沿岸いずれとも共通する植物種が見られます。植物の構成種から、最終氷期後の温暖化で、寒冷気候に適応した植物が北へ後退し、温暖気候に適応した植物は分布を北に拡大させ、現在の植生に至った様子を推測することができます。



アオキ



ヤブツバキ

太平洋沿岸要素の植物

■日本海側と太平洋側の植物

白鳥館が位置する北上盆地には、雪が多い奥羽山脈や高原性気候の北上山地よりも、比較的温暖な太平洋沿岸と共に分布する植物種が多く見られます。

例えば、アオキがそれにあたります。太平洋岸性のアオキは高さが3mにも達し、積雪のない乾燥、寒冷環境で直立します。これに対し、日本海側に分布する変種のヒメアオキは、丈も葉も小さく、幹が地表面を這って保温・保湿性の高い深い積雪の下で生育します。また、白鳥館では太平洋側で見られるヤブツバキが生育します。ヤブツバキも奥羽山脈の多雪地帯で見られるユキツバキと生育地を分けており、それぞれ乾燥環境と積雪環境に適応した形態・生活史を持っています。

■北上盆地と沿岸部に分布する植物（太平洋沿岸要素）

アオキ 【青木】

アオキ科 花期：3～4月

常緑の中低木で、暗い林の中で成長することができます。雄株と雌株があります。アオキは岩手県を北限に東北から四国東部の太平洋側に分布し、変種のヒメアオキは北海道から日本海側の多雪地域に分布し、環境に応じて生育地が分かれています。



スズメウリ 【雀瓜】

ウリ科 花期：8～9月

やや湿った場所に生え、ツル性で巻きひげで他の植物にからみます。カラスウリよりも小さい1～2cmの果実をつけるので、スズメのウリと名前が付けられています。本州から九州に分布します。



オヒシバ 【雄日芝】

イネ科 花期：8～10月

花軸が数本に分かれ、近縁種のメヒシバとよく似ていますが、全体的にたくましいので名前に「雄」がついています。畑地や日当たりのよい野原、路傍などに生育し、やや群生します。本州から九州に分布します。



力ヤ 【榧】

イチイ科 花期：5月



ウマノスズクサ 【馬の鈴草】

ウマノスズクサ科 花期：6～10月



オオバジヤノヒゲ 【大葉蛇の鬚】

キジカクシ科 花期：7～8月

山野の林内に生育し、匐枝を出して増え、群生します。北海道まで分布する近縁種のジャノヒゲより幅が広く厚みのある葉を持ちます。本州から九州にかけて分布します。

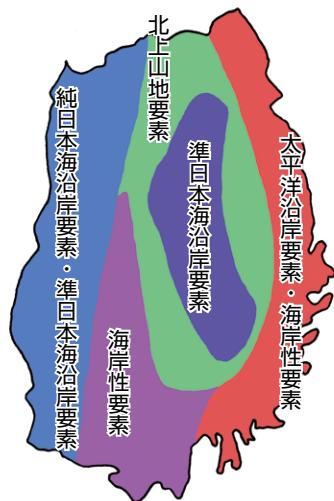


ウラシマソウ 【浦島草】

サトイモ科 花期：3～5月

花は仮炎苞と呼ばれる葉で囲まれ、花序の先の付属体が60cmにも伸び、浦島太郎の垂らす釣り糸のようなのでこの名がつきました。花から腐敗臭を発してキノコバエを呼び寄せて受粉します。北海道から九州に分布します。





岩手県の地理区分図

岩手縣植物誌（昭和45年(1970)
を参考に作図

■分布の変遷

白鳥館には岩手県周辺を南限とする種は見られませんが、北限とする種はウマノスズクサ、カヤ、アオキ、ユキノシタなどの種が見られます。

更新世（258万～1万年前）の地球は氷期と間氷期を繰り返していました。岩手の気候も今より概ね寒冷であったと考えられ、地球全体が寒冷化する氷期には、北方から亜寒帯性植物や高山および亜高山植物が分布を拡大していました。最終氷期後の完新世（1万年前～）に入って気候が温暖になるに従い、寒冷地に適応した植物は分布を北方や高山に後退させ、岩手県では奥羽山脈や北上山地の高山地域に一部残るのみになりました。一方、寒冷な気候を避けて南下していた植物が北へ分布を拡大し、太平洋沿岸地域から北上盆地に生育地を拡大して現在の分布に至ったと考えられます。

■沿岸部に分布する植物（海岸性要素）

ユキノシタ [雪の下]

ユキノシタ科 花期：5～6月

湿った岩の上などに生えます。冬でも雪の下で葉が枯れない、白い花が雪に似ている、など名前の由来が諸説あります。本州から九州にかけて分布します。



フキ [蕗]

キク科 花期：3～5月

本州から沖縄に分布し、山野に生えます。地下茎を伸ばして増え、最初に花茎をのばし、後から葉が出来ます。つぼみはフキノトウ、葉身と葉柄はフキとして食用になります。雄株と雌株があります。

■奥羽山脈に分布する植物（日本海沿岸要素）

エゾエンゴサク [蝦夷延胡索]

ケシ科 花期：4～6月

春から初夏にかけて2cm前後の青紫の花をつける、スプリンギング・エフェメラルです。塊茎が漢方薬の「延胡索」という鎮痛薬に用いたことが名前の由来です。北海道から中部地方に分布します。



オオハシカグサ [大麻疹草]

アカネ科 花期：8～9月

比較的湿気の多い場所に生え、茎の先端や葉のつけ根に小さな白い花をつきます。本州から沖縄に分布するハシカグサの変種で、オオハシカグサは中部地方の日本海側から東北地方に分布します。



■北上山地に分布する植物（北上山地要素）

キバナノアマナ [黄花の甘菜]

ユリ科 花期：4～5月

日当たりのよい野原や山麓で見られます。早春の短期間だけ葉をのばして光合成し、花期が終わると地上部が枯れるスプリング・エフェメラルです。北海道から、本州、四国に分布します。



ヒメニラ [姫韭]

ユリ科 花期：4～5月



標本はタイムマシン

標本は生物が生きていたその時、その場所の環境との相互作用を記録しています。写真や記録ではなく、生物体の実物を標本として残すため、標本から得られる情報は無限大です。

■100年前の植物標本

100年前の奥州市の植物標本が残っています。採集したのは和川仲治郎、江刺郡伊手村（現奥州市江刺区伊手）生まれの小学校教師でした。和川は岩手県周辺の植物、菌類等を採集し、国内外の著名な生物学者に標本を送り、意見交換などをしていました。「近代植物学の父」と呼ばれた牧野富太郎と研究での交流があったほか、『南方熊楠全集 粘菌目録』に和川が採集した粘菌の標本が記載されています。生涯で採集した標本は数千点にも上り、その一部が国立科学博物館などに残されています。



アスピカズラ
1905年 薬師岳



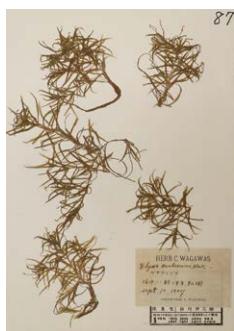
イワモダカ
1906年 種山

和川仲治郎採集標本

水沢農業高等学校 所蔵
和川は菌類、粘菌類、シダ植物などにも詳しく、水沢農業高等学校には、和川が集めた三陸沿岸の海藻類、県内外のシダ植物の標本が残されています。



スプタ
1907年 江刺郡伊手村松岡
(現奥州市江刺区伊手松岡)



ヤナギスプタ
1907年 江刺郡伊手村松岡
(現奥州市江刺区伊手松岡)

和川仲治郎採集標本

えさし郷土文化館 所蔵
スプタとヤナギスプタは水田や溝に群生する水草です。現在ではスプタは岩手県レッドデータブックのAランクに指定されており、水田や水辺の環境が100年あまりで大きく変化したことを示しています。

■地域の自然史博物館構想

戦前から地域の自然史博物館構想を持っていた人物がいました。胆沢郡水沢町福原（現奥州市水沢区福原）に生まれ、水澤農学校（現在の水澤農業高等学校）の教師だった岩淵初郎です。岩淵は昭和23年(1948)に水澤農学校内に「水澤科学博物館」を開館しました。開館当初の段階で、水澤科学博物館時報には、和川仲治郎はじめ県内外の植物研究家から寄贈された苔類、地衣類、菌類、藻類、維管束植物、合わせて約1万2000点、岩手県植物病害標本約1000点、昆虫標本約2000点のほか、岩淵自身が採集した植物標本約20万点が収蔵予定とされました。

水澤科学博物館では、学術標本の収集・保管・展示を中心に据え、模型資料や学術文献の収集公開、郷土史の特別展示、研究報告の発行、学術講演会や科学映画会の開催、採集会の出張などの学習指導といった活動も標榜していました。これらは現在の博物館が持つ、収集保存、調査研究、展示、教育普及の機能を満たしており、農業高校の付属施設に留まらず、地域の実物資料を蓄積する自然史博物館を目指していたことが分かります。

■標本のゆくえ

残念なことに、標本類を保管する本館が建設されることなく、水澤科学博物館は事実上自然消滅することになります。おそらく、岩淵が水澤農業高等学校を退職した昭和34年(1959)頃までは存続していたと考えられます。その後は標本類が体育館内の部屋に残されていたといい、校舎移転があった昭和43年(1968)頃に2700点が岩手県立博物館へ寄贈され、現在、水澤農業高等学校に標本の一部が残っています。地域の標本の多くが失われてしまったことは残念ですが、現在残された標本は二度と得ることのできない学術資料で、今後守られるべきものです。岩淵自身もヒメカイウを発見するなど、地元水沢を中心に植物研究を行っており、東北大学や京都大学に保存された岩淵の標本が調査研究に利用されてきました。



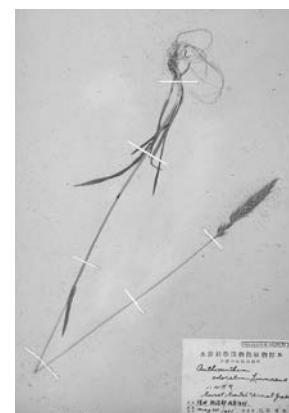
オキナグサ
1930年
左：盛岡市
右：胆沢郡水沢町福原
(現奥州市水沢区福原)



マイサギソウ
1930年 胆沢郡水沢町福原
(現奥州市水沢区福原)



ヒメニラ
1933年 江刺郡黒石村
(現奥州市水沢区黒石)



ハルガヤ
1951年 胆沢郡佐倉河村
(現奥州市水沢区佐倉河)

岩淵初郎採集標本

水沢農業高等学校 所蔵

標本台紙に「水澤科博」の判と標本の資料番号が記載されています。現在では、オキナグサ、マイサギソウは岩手県レッドデータブックに掲載される希少種になっており、1930年には水沢の田園地帯でこれらの植物が生育する環境があったことが分かります。外来種のハルガヤの標本は、戦後のこの時点でこの種が岩手県に定着していた証拠です。

■標本からもたらされる情報

生物体そのものを残す標本は、写真やデータの記録と違ってどんな知見をもたらしてくれるでしょうか。過去の植物標本が残っていれば、現在の植物リストと比較して外来種がこの地域に定着した時期を推定することができるかもしれません。同定が間違っていたり、分類体系が変わったとしても問題ありません。実物が残っているので、標本を見直して調べなおすことができるからです。また、花や実のついた標本であれば、開花時期や頻度を推定することも可能です。さらに近年、標本からDNAを取り出して塩基配列を分析する技術が発展してきました。DNAには過去に先祖に生じた突然変異が蓄積されており、この配列を解読することでたくさんの情報が得られます。例えば、配列の共通性から、生物同士の近縁関係が分かります。また、詳細に調べていくと、個体群が過去に経験した個体数の増減、生息地の移動、拡大などの変遷を知ることも可能です。実物標本であるからこそ、将来さまざまな視点での調査研究が可能になるのです。

■植物標本のつくりかた

陸上植物の標本をつくるのはそれほど難しくありません。草本の場合は陸上部分と一緒に根をきれいに掘りとり、木本の場合は枝を切って、新聞紙などにはさんで重石をして水分を吸い取ります。植物が乾燥するまで1~2週間ほど毎日はさんだ紙を交換します。乾燥した植物を、細く切った紙などで花や葉の形がよく見えるように台紙にとめ、固定します。台紙には標本ラベルを貼ります。和名、学名、科名などの他に、採集場所、採集年月日、採集者氏名、植物の特徴や生育環境なども記録します。これらは採集者が忘れてしまったら永久に失われてしまう情報で、標本が学術資料となるために欠かせないものです。

■保全の道しるべ

自然環境を保全していく上で、標本から得られる情報は今後の保全対策の道しるべになり得ます。環境は常に変化しており、世代が変われば、現在の個体は過去の個体とは形態的、遺伝的にも違うものになっていきます。そのため、絶滅に追いやられる生物においてはもちろん、保存していく個体群や種でも、標本による記録は大切です。その地域で、その時期にしか得られない生物を記録・保存するのが標本の役割です。標本を保存しておけば、過去・現在の標本に基づいて分布情報や遺伝的多様性を評価することができ、その生物が環境に応じてどのように変化しているのかを知り、自然を適切に保全管理していく計画を立てることができます。地域の自然の保全と、標本保存はお互いを補い合う両輪になるのです。

白鳥館遺跡の植物 全種リスト

平成19年（2007）は前沢の自然編集委員会、
平成29年（2017）は奥州市牛の博物館による調査結果

科名	和名	H19	H29	RDB-岩手	RDB-環境省	外来種
トクサ科	スギナ	✓	✓			
ハナヤスリ科	ナツノハナワラビ	✓				
チャセンシダ科	トロノオシダ		✓			
オシダ科	ホソバナライシダ		✓			
	リョウメンシダ	✓	✓			
	ヤマヤブソテツ		✓			
	オシダ	✓	✓			
	オクマワラビ		✓			
	ツヤナシノイデ		✓			
	サカゲイノイデ		✓			
メシダ科	イヌワラビ	✓				
イワデンダ科	サトメシダ		✓			
	ヤマイヌワラビ		✓			
	ヘビノネゴザ		✓			
	ホソバシケシダ		✓			
	シケシダ		✓			
	クサソテツ	✓	✓			
	コウヤワラビ	✓	✓			
スギ科	スギ	✓	✓			
イチイ科	カヤ	✓	✓	D		
クルミ科	オニグルミ	✓	✓			
ヤナギ科	シロヤナギ	✓	✓			
	タチヤナギ	✓	✓			
	ヤマネコヤナギ（バッコヤナギ）	✓				
	カワヤナギ	✓				
	ネコヤナギ	✓				
	オノエヤナギ	✓				
カバノキ科	ツノハシバミ		✓			
	ハンノキ	✓				
	アカシテ	✓				
ブナ科	クリ	✓	✓			
	ナラガシワ		✓	C		
	コナラ	✓	✓			
ニレ科	エゾエノキ	✓	✓			
	エノキ	✓	✓			
	ケヤキ	✓	✓			
クワ科	ヒメコウジ	✓	✓			
	カジノキ		✓			
	クワクサ		✓			
	カナムグラ	✓	✓			
	カラハナソウ	✓	✓			
	ヤマグワ		✓			
	マグワ		✓			その他
イラクサ科	カラムシ	✓	✓			
	アカソ		✓			
	ウワバミソウ		✓			
	ムカゴイラクサ	✓	✓			
	ミヤマイラクサ	✓	✓			
	アオミズ	✓	✓			
	エゾイラクサ	✓	✓			
タデ科	ミズヒキ	✓	✓			
	オオツルイタドリ		✓			その他
	イヌタデ	✓	✓			
	イシミカワ	✓				
	アキノウナギツカミ	✓				
	タニソバ		✓			
	ミゾソバ	✓	✓			
	ハナタデ	✓	✓			
	イタドリ	✓	✓			
	オオイタドリ	✓				
ヤマゴボウ科	エゾノギシギシ	✓	✓			生態系
	スイバ	✓	✓			
	ギシギシ	✓				
	ヨウシュヤマゴボウ	✓	✓			その他
	ザクロソウ科	ザクロソウ				
スペリヒユ科	スペリヒユ	✓	✓			
	オランダミニナグサ	✓	✓			その他
	ミニナグサ	✓	✓			
	ウシハコベ	✓	✓			
	サワハコベ	✓				
ナデシコ科	ツメクサ		✓			
	ノミノフスマ		✓			
	コハコベ（ハコベ）	✓	✓			
	シロザ	✓				その他
ヒユ科	イノコズチ	✓	✓			
	ヒナタイノコズチ		✓			
	イヌビュ	✓				その他
モクレン科	ホオノキ	✓	✓			
マツブサ科	キタコブシ	✓	✓			
	シキミ		✓			

RDB岩手：レッドデータブック岩手2014年版カテゴリー

岩手の希少な野生生物

RDB環境省：レッドデータブック岩手2014年版カテゴリー

日本の絶滅のおそれのある野生生物

外 来 種：特定外来生物/生態系被害防止外来生物/その他の外来植物

科名	和名	H19	H29	RDB-岩手	RDB-環境省	外来種
クスノキ科	アブラチャラン		✓			
キンポウゲ科	アズマイチゲ	✓	✓			
	ボタンヅル	✓	✓			
	キツネノボタン	✓				
	ケキツネノボタン		✓			
	ヤマキツネノボタン		✓			
	アキカラマツ		✓			
アケビ科	アケビ	✓	✓			
ツヅラフジ科	ミツバアケビ	✓	✓			
ドクダミ科	コウモリカズラ	✓	✓			
センリョウ科	ドクダミ	✓	✓			
ウマノスズクサ科	フタリシズカ	✓	✓			
マタタビ科	ウマノスズクサ		✓	D		
オトギリソウ科	ガルナシ	✓	✓			
ツバキ科	マタタビ	✓	✓			
アブラナ科	オトギリソウ	✓				
ケシ科	ツバキ		✓			
	クサノオウ	✓	✓			
	エゾエンゴサク		✓			
	ムラサキケマン	✓	✓			
アブラナ科	ヤマエンゴサク	✓	✓			
	ヤマハタザオ	✓				
	ハルザキヤマガラシ		✓			生態系
	セイヨウアブラナ		✓			その他
	ナズナ	✓	✓			
	タネツケバナ	✓	✓			
	ミチタネツケバナ		✓			その他
	コンロンソウ		✓			
	オオバタネツケバナ	✓	✓			
	イヌガラシ	✓	✓			
ベンケイソウ科	ワサビ	✓	✓			
ユキノシタ科	コモチマンネングサ	✓	✓			
バラ科	ヤマネコノメソウ	✓	✓			
	ウツギ		✓			
	ユキノシタ		✓			
	ヘビイチゴ	✓	✓			
	ダイコンソウ	✓	✓			
	ヤマブキ	✓	✓			
	ヒメヘビイチゴ	✓	✓			
	ウワミズサクラ	✓	✓			
	エドヒガン	✓	✓			
	カスミサクラ		✓			
マメ科	ノイバラ	✓	✓			
	モミジイチゴ	✓	✓			
	ナワシロイチゴ		✓			
	ココメウツギ		✓			
	ネムノキ	✓	✓			
	ヤブマメ	✓	✓			
	ヌスピトハギ	✓	✓			
カタバミ科	ヤマハギ		✓			
	イヌエンジュ		✓			
	クズ	✓	✓			
	ハリエンジュ（ニセアカシア）	✓				その他
	コメツブツメクサ		✓			その他
	ムラサキツメクサ	✓	✓			その他
	シロツメクサ	✓	✓			その他
フウロソウ科	ツルフジバカラマ		✓			
	フジ	✓	✓			
	ヤハズエンドウ		✓			
	カタバミ	✓	✓			
	エゾタチカタバミ		✓			
トウダイグサ科	オツタチカタバミ	✓				その他
	アメリカフウロ	✓	✓			その他
	ゲンノショウコ	✓	✓			
	ミツバフウロ	✓				
ミカン科	エノキグサ	✓	✓			
	コニシキソウ	✓	✓			
	コクサギ	✓	✓			
	キハダ	✓	✓			
ニガキ科	サンショウ	✓	✓			
	イヌザンショウ	✓				
	ニガキ		✓			
	ツタウルシ	✓	✓			
ウルシ科	ヌルデ	✓	✓			
	ヤマウルシ		✓			
	オオモミジ		✓			
	ヤマモミジ	✓	✓			
カエデ科	ミツデカエデ	✓	✓			
	エゾイタヤ	✓	✓			
	イロハモミジ		✓			
	マツブサ科	シキミ	✓			

科名	和名	H19	H29	RDB-岩手	RDB-環境省	外来種
トチノキ科	トチノキ	✓	✓			
アワブキ科	アワブキ	✓	✓			
ツリフネソウ科	キツリフネ	✓	✓			
	ツリフネソウ		✓			
モチノキ科	イヌツゲ		✓			
	アオハダ		✓			
ニシキギ科	イワウメツル	✓				
	ツルウメモドキ		✓			
	ニシキギ		✓			
	コマユミ	✓	✓			
	ツルマサキ	✓	✓			
	ツリバナ	✓	✓			
	マユミ	✓	✓			
	ミツバウツギ科	ミツバウツギ	✓	✓		
クロウメモドキ科	クマヤナギ		✓			
	ケンボナシ	✓	✓			
ブドウ科	ノブドウ	✓	✓			
	ヤブガラシ	✓	✓			
	ツタ	✓	✓			
	ヤマブドウ		✓			
	エビヅル		✓			
グミ科	ナツグミ		✓			
スミレ科	タチツボスミレ	✓	✓			
	アオイスミレ	✓				
	オオタチツボスミレ	✓	✓			
	ツボスミレ	✓	✓			
ウリ科	アマチャヅル	✓				
	スズメウリ	✓	✓			
	アレチウリ	✓	✓		特 定	
	キカラスウリ	✓	✓			
アカバナ科	オオマツヨイグサ	✓			その他	
	ミズタマソウ		✓			
	チョウジタデ		✓			
	メマツヨイグサ		✓		その他	
ミズキ科	ヤマボウシ		✓			
	ミズキ	✓	✓			
ウコギ科	アオキ科	アオキ	✓	✓		
	ヤマウコギ	✓	✓			
	タラノキ	✓	✓			
	キツタ	✓	✓			
	セイヨウキツタ	✓			その他	
セリ科	ハリギリ	✓	✓			
	ミツバ	✓	✓			
	オオナウド	✓	✓			
	オオチドメ		✓			
	セリ	✓	✓			
	ヤブニンジン	✓	✓			
	ウマノミツバ	✓	✓			
	オヤブジラミ		✓			
	ヤブジラミ	✓				
サクラソウ科	コナスピ	✓	✓			
エゴノキ科	エゴノキ	✓	✓			
モクセイ科	ヤチダモ		✓			
ガガイモ科	イボタノキ	✓	✓			
ナス科	ガガイモ	✓	✓			
ヒルガオ科	イガホオズキ	✓	✓			
	ヒヨドリジョウゴ	✓	✓			
アカネ科	ヒルガオ	✓	✓			
	クルマバソウ		✓			
	ヤエムグラ	✓	✓			
	クルマムグラ	✓				
	ヨツバムグラ		✓			
	オオハシカグサ		✓			
ムラサキ科	ヤイトバナ		✓			
	アカネ	✓	✓			
	ハナイバナ	✓	✓			
クマツツラ科	ノハラムラサキ		✓		その他	
	キュウリグサ		✓			
シソ科	ムラサキシキブ	✓	✓			
	クサギ	✓	✓			
	キラソウ	✓	✓			
	イヌトウバナ	✓	✓			
	ナギナタコウジュ	✓				
	カキドオシ	✓	✓			
ハエドクソウ科	ヒメオドリソウ	✓	✓		その他	
	シソ	✓				
キリ科	ハエドクソウ	✓	✓			
	キリ	✓				
ゴマノハグサ科	アメリカアゼナ		✓		その他	
	アゼナ		✓			

科名	和名	H19	H29	RDB-岩手	RDB-環境省	外来種
ゴマノハグサ科	サギゴケ		✓			
	トキワハゼ		✓			
	タチイヌノフグリ	✓	✓		その他	
オオバコ科	オオバコ	✓	✓			
	ヘラオオバコ		✓			その他
キツネノマゴ科	キツネノマゴ		✓			
キキョウ科	ツルニンジン	✓				
	ホタルブクロ		✓			
	ミゾカクシ	✓	✓			
スイカズラ科	スイカズラ	✓	✓			
	ニワトコ	✓	✓			
	ガマズミ		✓			
	ケナシヤブデマリ		✓			
	マルバゴマキ	✓	✓			
	ミヤマガマズミ		✓			
	オミナエシ	✓		C		
	ツルカノコソウ	✓	✓			
キク科	クワモドキ(オオタクサ)	✓			その他	
	ヨモギ	✓	✓			
	シロヨメナ		✓			
	アメリカセンダングサ	✓	✓		生態系	
	エゾノキツネアザミ	✓				
	タマブキ	✓				
	タウコギ		✓			
	トキンソウ	✓	✓			
	ナンブアザミ	✓	✓			
	ベニバナボロギク	✓			その他	
	ダンドボロギク		✓		その他	
	ヒメカシヨモギ	✓	✓		その他	
	ハルジオン	✓	✓		その他	
キク科	ヒヨドリバナ	✓	✓			
	ハキダメギク	✓	✓		その他	
	ハバコグサ	✓	✓			
	キクイモ		✓		その他	
	オオジシバリ	✓	✓			
	ニガナ		✓			
	イワニガナ		✓			
	ユウガギク	✓	✓			
	カントウヨメナ		✓			
	ヤブタビラコ	✓	✓			
	アキノノゲシ	✓	✓		その他	
オモダカ科	メタカラコウ	✓	✓	C		
	フキ	✓	✓			
	アキノキリンソウ	✓				
	アキタブキ		✓			
	コウゾリナ		✓			
	セイタカアワダチソウ		✓		生態系	
	オオアワダチソウ		✓		生態系	
	オニノゲシ	✓	✓		その他	
	ノゲシ		✓			
	ヒメジョオン	✓	✓		生態系	
ユリ科	ノボロギク	✓	✓		その他	
	エゾタンボポ	✓	✓			
	セイヨウタンボポ	✓	✓		生態系	
	ヤクシソウ	✓				
	オニタビラコ	✓	✓			
	オモダカ		✓			
	ノビル	✓	✓			
	ヒメニラ	✓	✓			
	アサツキ	✓	✓			
	ウバユリ	✓	✓			
ヒガンバナ科	チゴユリ		✓			
	キバナノアマナ	✓	✓			
	ヤブカンゾウ	✓	✓			
	ヒメヤプラン		✓			
	ジャノヒゲ	✓	✓			
	ナルコユリ		✓			
	サルトリイバラ		✓			
	シオデ	✓	✓			
	ヤマカシユウ	✓	✓			
	シユロソウ科	エンレイソウ	✓	✓		
キジカクシ科	オオバジャノヒゲ	✓	✓			
	ヒガンバナ		✓			
	キツネノカミソリ	✓	✓			
	ナツズイセン	✓	✓			
ヤマノイモ科	ヤマノイモ	✓	✓			
	オニドコロ	✓	✓			
	ミズアオイ	コナギ		✓		
	アヤメ科	シャガ	✓	✓		

科名	和名	H19	H29	RDB-岩手	RDB-環境省	外来種
イグサ科	ヌカボシソウ	✓				
	イ (イグサ)		✓			
	クサイ		✓			
ツユクサ科	ツユクサ	✓	✓			
	イボクサ		✓			
	アオカモジグサ	✓	✓			
イネ科	カモジグサ	✓	✓			
	ヌカボ		✓			
	スズメノテッポウ	✓	✓			その他
	ヤマカモジグサ	✓				
	ハルガヤ		✓			生態系
	キツネガヤ		✓			
	カモガヤ	✓	✓			生態系
	メヒシバ	✓	✓			
	アキメヒシバ	✓				
	イヌビエ	✓	✓			
	タイヌビエ		✓			
	カゼクサ	✓				
	ネズミムギ	✓				その他
	オヒシバ		✓			
カヤツリグサ科	コスズメガヤ		✓			その他
	オニウシノケグサ	✓				生態系
	ナギナタガヤ		✓			生態系
	ドジョウツナギ		✓			
	チガヤ		✓			
	ササガヤ		✓			
	アシボソ		✓			
	ススキ		✓			
	チヂミザサ	✓	✓			
	ヌカキビ		✓			
	スズメノヒエ		✓			その他
	チカラシバ		✓			
	クサヨシ		✓			

科名	和名	H19	H29	RDB-岩手	RDB-環境省	外来種
イネ科	ヨシ	✓				
	スズメノカタビラ	✓	✓			
	ナガハグサ		✓			その他
	イチゴツナギ	✓	✓			
	アキノエノコログサ		✓			
	キンエノコロ	✓	✓			
	エノコログサ	✓	✓			
	カニツリグサ	✓	✓			
	アズマネザサ	✓	✓			
	アズマザサ	✓	✓			
サトイモ科	マムシグサ	✓	✓			
	オオマムシグサ		✓			
	ウラシマソウ	✓	✓			
	カラスピシャク	✓	✓			
	ヒメザゼンソウ	✓	✓			
ウキクサ科	オオウキクサ		✓			
	エナシヒゴクサ		✓			
	カワラスゲ	✓	✓			
	イトアオスゲ		✓			
	ビロードスゲ		✓			
	コジユズスゲ		✓			
	ヤブスゲ	✓	✓			
	チャガヤツリ		✓			
	ヒメクグ	✓	✓			
	タマガヤツリ		✓			
ラン科	アゼガヤツリ		✓			
	カヤツリグサ	✓	✓			
	ウシクグ		✓			
	カワラスガナ		✓			
	イヌホタルイ		✓			
	アブラガヤ		✓			
	サイハイラン	✓	✓			

参考文献

- 岩手植物の会 (1970) 岩手県植物誌. 岩手県教育委員会
 江刺市教材センター (1973) 和川標本録. 江刺市教材センター
 井上幸三 (1991) 岩手県植物自然史. 岩手植物の会
 茂木透写真・太田和夫・勝山輝男解説 (2000) 樹に咲く花 離弁花2. 山と渓谷社
 千田善昭 (2003) 水沢の生んだ植物研究家・岩淵初郎. 胆江地区民間教育研究団体協議会
 大住克博・杉田久志・池田重人編 (2005) 森の生態史-北上山地の景観とその成り立ち-. 古今書院
 佐久間大輔 (2005) 博物館の生態学自然史系博物館における潜在的可能性-総合討論をふまえた現状分析と連携の提言-. 日本生態学会誌 55: 474-480
 鈴木まほろ (2007) 博物館と生態学 (4) 博物館が所蔵する生物標本の生態学的利用事例. 日本生態学会誌 57: 129-132
 前沢の自然編集委員会 (2008) 白鳥館植物調査報告書. 前沢の自然編集委員会
 林弥栄監修・門田裕一改訂版監修・平野隆久監修 (2013) 野に咲く花 増補改訂新版. 山と渓谷社
 門田裕一改訂版監修・永田芳男写真・畔上能力解説 (2013) 山に咲く花 増補改訂新版. 山と渓谷社
 宮内泰之監修 (2017) 里山さんぽ植物図鑑. 成美堂出版
 牛の博物館 (2018) 国指定史跡白鳥館遺跡植物調査報告書. 牛の博物館



企画展示協力

〔敬称略順不同〕
 岩手県立水沢農業高等学校 えさし郷土文化館 奥州市世界遺産登録推進室 阿部慶元 川田昌代

牛の博物館 郷土の企画展 白鳥館の植物 ー人里の草花ー

2018年2月24日（土）～2018年5月6日（日）

主 催：奥州市牛の博物館

企画展示構成：鈴木啓一（館長） 後藤 聰（館長補佐）

川田啓介（主査兼上席主任学芸員） 朴沢志津江（主任学芸員）

森本 陽（主任学芸員） 本明優理（学芸調査員） 佐藤友反映（学芸調査員）

並木綾子（学芸調査員）

発 行：奥州市牛の博物館 〒029-4205 岩手県奥州市前沢区字南陣場103-1

Tel 0197-56-7666 Fax 0197-56-6264

発 行 日：平成30年（2018）2月24日